

思い出す人々



西山 厚 全24回

第7回 【西行】

芭蕉は西行さいぎょうが好きだった。西行は約2300首の歌を残しているが、私にはこの歌がもっとも印象深い。

年たけてまた越ゆべしと思ひきや

命なりけり さやの中山

こんなに年をとつてから、またここを越えることになろうとは思わなかった。命なりけり、小夜さやの中山。

小夜の中山は東海道の難所。命なりけりとはどういう意味だろうか。命があつてのことのような現代語訳を見かけるが、いい訳とは思えない。

現代語訳すると深みがなくなるので、無理に訳す必要はないが、あえて試みるならこんな感じだろうか。命とは不思議なものだ。ああ、小夜の中山よ。

西行が小夜の中山を越えるのはおよそ40年ぶりのことだった。あれからいつの間にか長い時が流れていた。そしてそれからまた100年ほどが過ぎて、西行にあるこがれるひとりの女性がここを越えていく。

複数の男性との愛欲の日々に苦しんだ後深草院二条。宮廷を追われ、都を離れ、各地を旅するなかで、西行を思いながら記した。「程なく、小夜の中山に至りぬ。西行が、命なりけりとよみける、思ひいでられて」